月下の乱

HIRO.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の乱

【Ｎコード】

Ｎ４８９１Ｅ

【作者名】

ＨＩＲＯ．Ｔ

【あらすじ】

月光の下で繰り広げられる戦。その決着は…。

（前書き）

友人から頂いた言葉をタイトルとして書いた短編です。

カッと目を見開いた。
闇に紛れる漆黒の瞳は銀光に晒され、夜行性の獣のようだ。
轟と鳴る風。
怒声。
悲鳴。
己を鼓舞する声が満ち、人馬乱れ走る大地は震えている。

奇声が暗闇を裂き、迫る。
振り下ろされる剣を剣でなぎ払い相手を見た。
片目の男。
眼孔が落ち込み暗い穴のようだ。
睨み付ければ怯むかと思えば、立ち上がり間合いもなく躍りかかってくる。

（狂気の沙汰だ。勝敗が決したからか？）

血に濡れた大地を踏みしめ、叩き付けてくる剣を受けながら戦場を見やる。
だが唯一の明かりであるはずの銀光が風景を霞ませ、戦況を計ることは出来なかった。
「チッ」
舌打ちして剣で突く。
致命傷を与えたかと思ったが、敵はヒラリと剣をかわし間合いの外でニヤリと笑ってみせた。
眼光鋭く見据えると、今度こそ本気で剣を振るう。

負けるはずがない。

倒されるはずがない。
己に言い聞かせて屠った。
血臭を沸き上がらせる漆黒の大地を踏みしめ、絶命した敵を見下ろす。
苦痛に満ちた死に顔かと思えば、何故か薄ら笑みを浮かべていた。
（狂ったか……）
あまりに長い今回の戦に、正常な心が蝕まれてしまったとしても不思議はない。
剣を振って血を落とすと、四方を見やり愛馬の姿を探した。
男の髪と瞳と同じ漆黒の暴れ馬。
だが微かな月光の下では見つけられない。
指笛を吹き、呼びながらぬかるみを走る。
男の存在に気付いて躍りかかってくる敵をなぎ倒すように切り捨て、戦場深く走り込もうとした瞬間、見慣れた黒馬が走り去った。
「シュトゥルム……」
愛馬の名を呟く。
見間違えるはずがない。
だがその背には荷物のような小さな子供が乗っていた。
立ち尽くして見送る。
付き従う五騎は群がる敵に立ち向かい、視界から消える頃には二騎が己の命と引き替えに敵を倒した。
走り追おうと数歩、足を踏み出す。
だが男は激しく頭を振ってから、月に届く絶叫を発した。
群がる敵兵。
「消えろ！　戻れ！」
世界を切り捨てる激しさで叫び剣を一閃させた。

「お頭！」
怒声に驚いて男が駆け寄ってきた。
「どうしたんです？　突然叫んで」
辺りは静寂に満ちた夜だった。
「……何でもない」
「そうですかい？　性悪魔女に化かされたような顔してますぜ」
「……ああ……それに近い」
剣を腰の鞘に収めて男は夜空に浮かぶ月を見上げた。
「誘惑するなら甘い方で願いたい。月の魔女殿」
「ははぁ。月光にイカれたって訳ですかい。くわばらくわばら」
ブルブルと故意に身体を震わせて、仲間の男は離れていった。
「オレの唯一の敗走劇を見せられるとは、月の女神も残酷だ」
だが月は変わらず、狂気の光で地上を照らしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4891e/

月下の乱

2010年11月24日05時52分発行